

## 序

私たちが暮らす高崎市は、古来より関東と信越地方を結ぶ交通の要衝として栄え、遠く古代では東山道、中世では鎌倉街道、近世では中山道、三国街道、日光例幣使街道など、その時代ごとにおいて幹線となる交通路が整備されてきました。そして、各地の人々がこの地に集い、新たな文化が育まれてきたことは想像に難くありません。

本市に所在する古代の石碑である上野三碑(山上碑・多胡碑・金井沢碑)は、古代のこの地に海外との交流があったことを示すものであり、その普遍的な価値が認められユネスコ『世界の記憶』に登録されました。上野三碑には今も多くの方々が訪れています。

中核都市である本市は、高速交通網が整備された現在においても北関東の拠点都市としての重要な役割を担い続けています。高崎駅へのジェットロ群馬貿易情報センター、倉渕地区への山村留学施設「くらぶち英語村」の開設は、高崎の地が現代においても国際的な交通拠点としてますます発展していくことを予感させます。

一方、開発地に存在する埋蔵文化財の保護をはかることは急務となっています。高崎市教育委員会では、各種の開発事業によって埋蔵文化財に影響がおよぶ恐れのある場合、事前に遺跡の確認・試掘調査を実施し、適切な保護措置を講じているところであります。

本書では、平成30年度に実施した国指定史跡浅間山古墳外堀の範囲確認調査の概要を報告しています。私たちの生活する地表下にある埋蔵文化財は、過去を知る、まさにタイムカプセルであり、その資料的価値の高さは計り知れません。先人の貴重な遺産である埋蔵文化財を守り、後世へと残し伝えることは、現代に生きる私たちの責務といえます。

最後に、遺跡の確認・試掘調査およびその後の保存措置にご協力いただきました関係諸機関の皆様に心より感謝申し上げます。

平成31年 3月

高崎市教育委員会

教育長 飯野 眞幸



## 例言

1. 本書は平成30年度国庫補助事業として、確認・試掘調査を実施した浅間山古墳範囲確認調査報告書である。
2. 本遺跡は、高崎市倉賀野町下正六469他に所在する。
3. 調査組織は以下のとおりである。  
高崎市教育委員会文化財保護課 埋蔵文化財係  
課長 角田真也 係長 神澤久幸 事務担当 金井英一 小池圭子 小暮里江 岡田清香  
調査担当 矢島 浩 田辺芳昭 飯塚 誠
4. 発掘調査期間は平成30年7月11日～平成30年7月28日、平成30年9月3日、4日である。
5. 本書の執筆・編集は矢島、飯塚が行った。
6. 調査記録について、高崎市教育委員会で管理している。
7. 調査にあたり、倉賀野町区長をはじめとする地元関係者にご協力をいただいた。

## 凡例

1. 本書に使用した地図は国土地理院発行1/25000地形図および1/2500高崎市都市計画基本図について任意縮尺を変更して使用した。
2. 本書の座標値は世界測地系であり、方位は座標北である。
3. 本書中の図版縮尺は各図に表示した。
4. 土層の色調および土壌の注記は、農水省農林水産技術会事務局および(財)日本色彩研究所監修『新版標準土色帖(1990年版)』を使用した。
5. 略号は次のとおりである。  
SD：溝、T：トレンチ
6. テフラには次の略号を使用した。  
As-A：浅間Aテフラ。1783年  
As-B：浅間Bテフラ。1108年  
Hr-FP：榛名二ツ岳伊香保テフラ。6世紀中葉  
Hr-FA：榛名二ツ岳渋川テフラ。6世紀初頭  
As-C：浅間Cテフラ。3世紀末～4世紀初頭

# 目次

序 例言 凡例	
第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第1節 遺跡の立地と地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	1
第3章 検出された遺構	2
第1節 既調査について	2
第2節 トレンチの状況	2
第4章 総括	15
写真図版	
抄録 奥付	

# 挿図目次

第1図 周辺の遺跡図
第2図 調査箇所位置図
第3図 調査区 東側 平面図
第4図 調査区 南側 平面図
第5図 1トレンチ・2トレンチ 平面図・断面図
第6図 3トレンチ・7トレンチ 平面図・断面図
第7図 4トレンチ北半 平面図・断面図
第8図 4トレンチ南半・12トレンチ 平面図・断面図
第9図 5トレンチ・6トレンチ 平面図・断面図
第10図 5トレンチ・6トレンチ 平面図・断面図
第11図 8トレンチ・9トレンチ・10トレンチ・11トレンチ 平面図
第12図 推定模式図

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成30年6月、高崎市倉賀野町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である国指定史跡「浅間山古墳」に隣接し、浅間山古墳の外堀内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。建設計画が具体化した同年6月29日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年7月11日から7月28日までと9月3日、4日に浅間山古墳外堀の範囲確認調査を実施した。

## 第2節 調査の方法

範囲確認調査は、平成30年7月11日から7月28日までの14日間と9月3日、4日の2日間実施した。

範囲確認調査は、開発範囲内にトレンチを設定し、遺構が確認される深さ(遺構確認面)まで上層の遺構に注意しながら重機を使用して表土除去作業を行った。更に外堀内について底部上層までの掘り込みを重機で行い、順次人力での掘削を行った。掘削が完了したトレンチは光波測距機で平面図、断面図および遺物出土状況の記録図作成を行い、35mmモノクロ・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラによる記録写真撮影を行った。全てのトレンチ調査が完了した後に埋め戻し作業を行った。

# 第2章 遺跡の立地と環境

## 第1節 遺跡の立地と地理的環境

高崎市は関東地方の北西部に位置し、赤城山・榛名山・妙義山の上毛三山が見渡せる。榛名山・妙義山の間からは有史以前から度重なる噴火を繰り返す浅間山を見ることが出来る。平地は榛名山扇状地からなる平野部が南東部に展開する。

本遺跡の所在する前橋・高崎台地は、井野川泥流堆積層(約1.1～1.3万年前)、浅間山・黒斑山体崩壊（2万年前）に起因する火山性泥流堆積層（前橋泥流）により形成された台地で、北西から南東へゆるく傾斜する。台地は榛名山南麓に沿って東流する烏川、榛名山南東麓斜面に発し東流する井野川などの河川や支流の影響を受け開析された自然堤防が発達した幅広い微高地や後背湿地を形成し、微高地には集落跡や古墳・館跡などが立地し、後背湿地には水田跡などが数多く点在する。

本遺跡は烏川左岸段丘上にあり、烏川の形成した崖線から800m北方に位置し、西側を烏川の支流である粕沢川に東側を無名小河川に画された北西から南東に延びる幅300mほどの微高地上に立地している。

## 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡周辺では数多くの遺跡が発見されている。以下その一部を取上げ、本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

本遺跡周辺では、厚い泥流層の堆積により旧石器時代の遺跡の検出は知られていない。烏川右岸の観音山丘陵に所在する少林山台遺跡で尖頭器と呼ばれる石器が出土しているが、他の遺跡からの明確な出土例はない。

縄文時代は、下佐野遺跡（8）で前期から中期・後期の数件規模の集落跡が検出されている。また、倉賀野万福寺遺跡（9）で加曽利E式期の竪穴建物跡が、倉賀野万福寺II遺跡では中期後半の竪穴建物跡、土坑が検出されている。宮ノ前遺跡、倉賀野IV遺跡では遺構の検出はないが縄文土器の出土があり周辺に存在する可能性が窺える。

弥生時代は、本遺跡北西側の台地部や、烏川沿いの縁辺部には中期後半の竜見町式土器の標識である竜見町遺跡や中期後半の土器を出土した競馬場遺跡、竪穴建物跡が確認された城南小学校遺跡などで小規模な集落跡が、後期では高関村前遺跡で竪穴建物跡が検出されている。烏川右岸の丘陵地では遺跡は検出されていない。

古墳時代は、烏川流域の下佐野町から倉賀野町にかけて左岸段丘上は、かつて300基近い古墳が点在していた地域とされている。その多くは開墾、開発等で削平され、墳丘を失っている。大鶴巻古墳（国指定史跡・4）は墳長123mの前方後円墳で馬蹄形状の周堀が残っている。5世紀後半の築造と考えられ。小鶴巻古墳（3）は墳長87.5mの

前方後円墳で舟形石棺を伴う5世紀後半代の築造と推定されている。大型円墳では粘土槨を埋葬施設とする大山古墳は5世紀前半ごろの築造と推定されている。終末期では、安楽寺の境内にあり墳丘の南半分を本堂建築により破壊された安楽寺古墳（県指定史跡・19）があり、横穴式石槨を採用した希少例である。築造は7世紀末と推定されている。倉賀野万福寺遺跡、倉賀野万福寺Ⅱ遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。5世紀から7世紀にかけて大古墳群が形成されたことは、支配階級層の存在が窺われるものである。集落は下佐野遺跡で古墳時代前期から後期にわたる集落が、微高地上では下中居条里遺跡で古墳時代前期の竪穴建物跡が検出されている。

奈良・平安時代は、律令に基づいて地方社会では郡郷制などの組織改編で社会制度が大きく変化し、郡の下には里（郷）が置かれ50戸をもって一里と為すと規定されたとしている。このことにより、古墳時代から続く伝統的集落は減少し、新設された集落遺跡が見られるとしている。周辺では微高地や台地縁辺部に舟橋遺跡（6）、下中居条里遺跡などの集落が点在する。また、微高地状やそれに続く低地では水田開発が広く行われ生産域として発展していることが窺われる。付近のAs-B下水田跡では下之城村西遺跡、下之城北Ⅱ遺跡、下之城村前Ⅱ遺跡、下之城村東遺跡、宮原町遺跡、宮原町2遺跡（18）などがある。下之城、下中居、矢中、倉賀野地域においては条里制地割をうかがわせる大畦畔や水路などが検出されている。条里制の地割については、現利根川を挟んで兩岸のAs-B下水田跡に伴う大畦畔の位置は、東西方向は同じ地割にのるが南北方向の大畦畔は西横手地区で確認された条里地割を適合させると西へ10.2m程ずれてしまうという報告もある。南北方向は利根川を挟んで条里地割が異なることが指摘され、この地点が条里地割の境界になったことが推定されている。

中世は和田氏、倉賀野氏などの武士がこの地に居を構える。和田下之城は16世紀後半に当初、和田業繁が弟正盛のために築いたとされているが、その後和田昌繁が築城（改修強化）したとされている。倉賀野城は現在の倉賀野町中心部から烏川崖の間で西辺は倉賀野神社、東辺は五貫堀川までの広範囲に築城されている。応永年間（1394～1427年）に武蔵七党の一つの児玉党の倉賀野三郎高俊が築いたといわれている。その後数々の戦乱で城主が変わり、天正18年（1590年）豊臣勢の侵攻により落城した。

近世において倉賀野は中山道の宿場町として、また慶長年間（1596～1615年）には利根川上流に倉賀野河岸が開設し、江戸と信越を結ぶ重要な交通の要所として栄えた。

## 第3章 検出された遺構

### 第1節 既調査について

浅間山古墳（国指定史跡）は全長約171.5mの前方後円墳で、主軸方向N - 34° 50' - Eである。標高85mの平坦地上に立地している。墳丘各所の規模は、後円部径約105m、前方部長66.3m、前方部前端幅約74.8m、くびれ部幅50m、後円部高14.1m、前方部高5.5mを測る。墳丘は農耕地として改変が著しいが、その構築は前方部2段、後円部3段の築成と考えられる。馬蹄形状の周堀が残っている。築造は4世紀後半から5世紀初頭と推定され、県内最大の太田市天神山古墳（全長210m、5世紀中頃）に次ぐ規模を持っている。

平成7年度（1995年）の試掘調査において浅間山古墳の中堤と外堀が確認されている。中堤の推定幅は9mから10m、中堤の外側を30cm前後の河原石を根石として10cm前後の河原石を主体に堀底まで葺いている。中堤の上面と堀底の段差は40cmから60cm、堀底はほぼ平坦であった。外堀の立上がり部は確認されなかった。

平成9年度（1997年）の試掘調査において外堀の立上がり部が確認されている。外堀の推定幅は56mから65mを測り、外堀の深さは外堀立上がり部付近で90cm、墳丘よりで95cmを測る。外堀立上がり部では葺石は確認されなかった。外堤は確認されない。

平成15年度（2004年）の試掘調査では、中堤外側の葺石が検出されている。外堀は、黒褐色のシルト土層が船底形を呈したものが想定されている。幅8m、深さ80cmを測る。後円部西側面の外堀については、西に粕沢川の侵食谷と重複してしまうため幅が狭くなったものと考えられる。

### 第2節 トレンチ

1 トレンチ（第5図/PL1・2） 東西に約21m、幅約1.5m。中堤外側の葺石と外堀を検出した。中堤の葺石はほとん

どが崩落し、根石から5段分残されていた。外堀の幅は、中堤の上場では19.4m、底部では18.2mを測る。外堀の深さは、中堤上部から38cmから90cmを測る。中堤から中央部までは船底形を呈するが、中央部から外堀の立上がり部まではほぼ平坦である。

2トレンチ（第5図/PL2） 東西に約17.2m、幅1.5m。中堤外側の葦石と外堀を検出した。中堤の葦石はほとんどが崩落し、根石から5段分残されていた。外堀の幅は、中堤の上場では12.8m、底部では10mを測る。外堀の深さは、中堤上部から22cmから47cmを測る。中堤から外堀の立上がり部まではほぼ平坦である。

3トレンチ（第6図/PL2・3） 東西に約13.6m、幅1.5m。中堤外側の葦石と外堀を検出した。中堤の葦石はほとんどが崩落し、根石から5段分残されていた。外堀の幅は、中堤の上場では10.4m、底部では8.5mを測る。外堀の深さは、中堤上部から38cmから66cmを測る。中堤から中央部までは船底形を呈するが、中央部から外堀の立上がり部まではほぼ平坦である。

4トレンチ（第7・8図/PL3） 南北に約94m、幅1.5m。中堤外側の葦石と外堀を検出した。中堤の葦石はほとんどが崩落し、崩落石が集積していた。外堀の幅は、中堤の上場では22.6m、底部では20.4mを測る。外堀の深さは、中堤上部から25cmから44cmを測る。中堤から外堀の立上がり部までは緩やかな船底形を呈している。外堀の中央部付近では約10cmから約30cmの河原石が敷かれた様な状態で検出された。立上がり部から内側約7mまで黒褐色土を含む地山土ブロックの人為的な盛土層が検出された。外堀の立上がり部から南に直線的に並ぶ3段の石組みが検出された。この石組みの周りは掘り込まれ幅6.2m、深さ52cmを測り、古墳の周堀状を呈していた。この遺構より南は緩やかに南に傾斜する自然地形となっていた。外堤は確認されなかった。

5トレンチ（第9図/PL3・4） 南北に約72m、幅1.5m。中堤外側の葦石と外堀を検出した。中堤の葦石はほとんどが崩落し、根石が残されていた。外堀の幅は、中堤の上場では25.7m、底部では25.2mを測る。外堀の深さは、中堤上部から45cmから53cmを測る。中堤から外堀の立上がり部まではほぼ平坦である。外堀中央部付近に溝が検出された。この溝の覆土は他のトレンチ下層と同じ粘性の強いシルト質土で外堀を構築時に作られたものと想定される。また、立上がり部から南は近世の溝が入るが、南に傾斜する自然地形となっていた。外堤は確認されなかった。

6トレンチ（第9図/PL4） 南北に28.5m、幅1.5m。中堤と外堀を検出した。中堤の葦石は耕作により抜き取られていた。外堀の幅は、中堤の上場では25.3m、底部では24mを測る。外堀の深さは、中堤上部から20cmから23cmを測る。中堤から外堀の立上がり部まではほぼ平坦である。外堀中央部付近に5トレンチから続くものと考えられる溝が検出された。

7トレンチ（第6図/PL4・5） 北東方向に32.7m、幅2m。中堤は検出されず、外堀だけ検出した。外堀の深さは、外堀立上がり部から36cmから52cmを測る。外堀底はほぼ平坦で4トレンチと同様に約10cmから約30cmの河原石が敷かれた様な状態で検出された。この石敷きは鉄分を含んだ砂層で覆われていた。立上がり部から先は耕作により水田になっている。

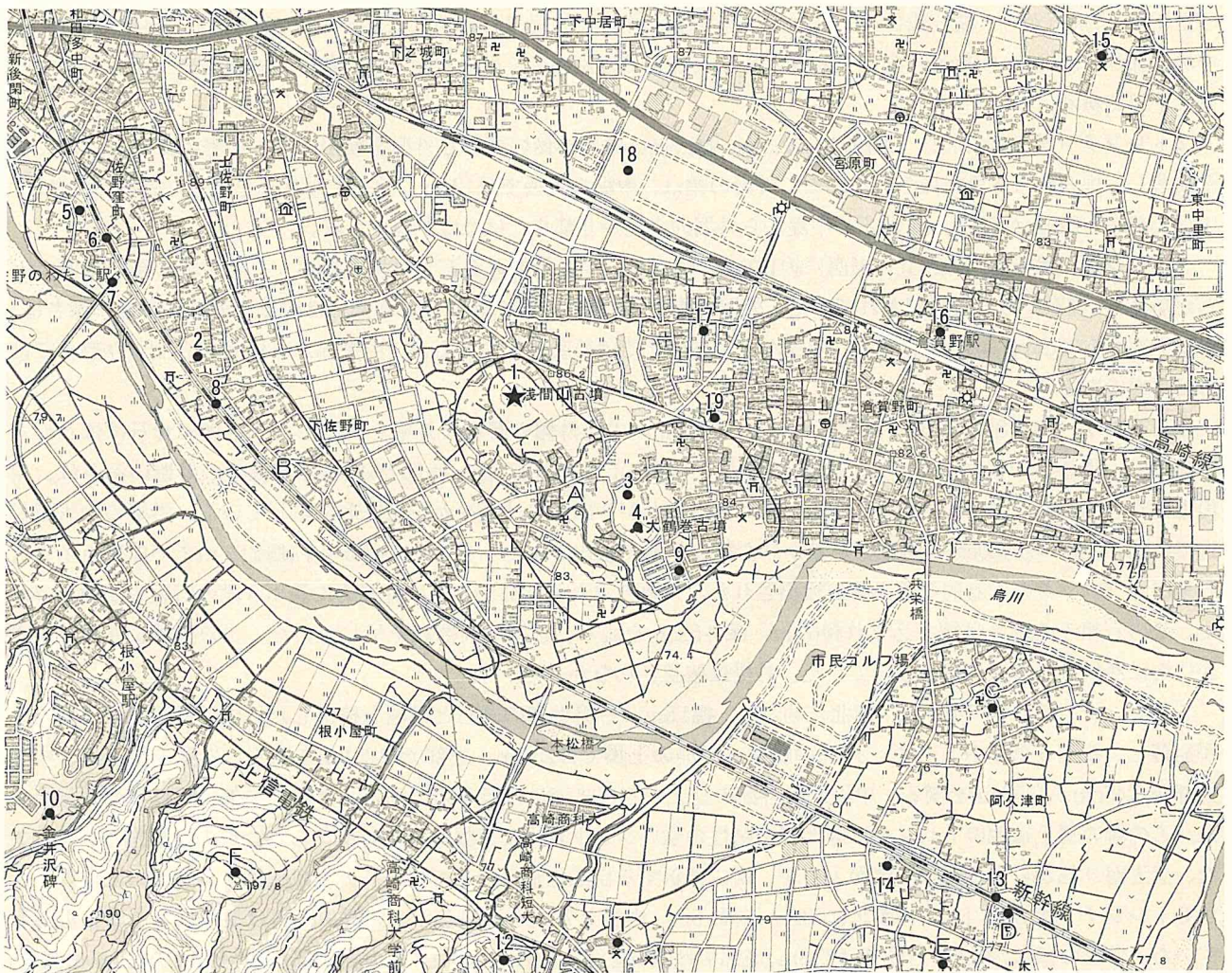
8トレンチから11トレンチは外堀の立上がり部を確認するためにトレンチを入れた。12トレンチは4トレンチで確認された葦石の範囲を確認した。

8・9トレンチ（第11図/PL5） 5・6トレンチの間、南北に6m、幅1m。5・6トレンチ同様な外堀の立上がり部を検出した。

10トレンチ（第11図/PL5） 4・5トレンチの間、南北に4m、幅1m。4・5トレンチ同様な外堀の立上がり部を検出した。

11トレンチ（第11図/PL5） 4・5トレンチの間、南北に5m、幅1m。外堀の立上がり部は他のトレンチで確認された立上がり部よりも40cm低い。

12トレンチ（第8図/PL5） 4・11トレンチの間、東西に14m、幅1m。4・7トレンチ同様に鉄分を含んだ砂層で覆われた石敷きを確認された。外堀の立上がり部は確認されなかった。4トレンチで確認された葦石の周堀を確認した。この葦石は外堀の埋没後に造られた物と考えられる。



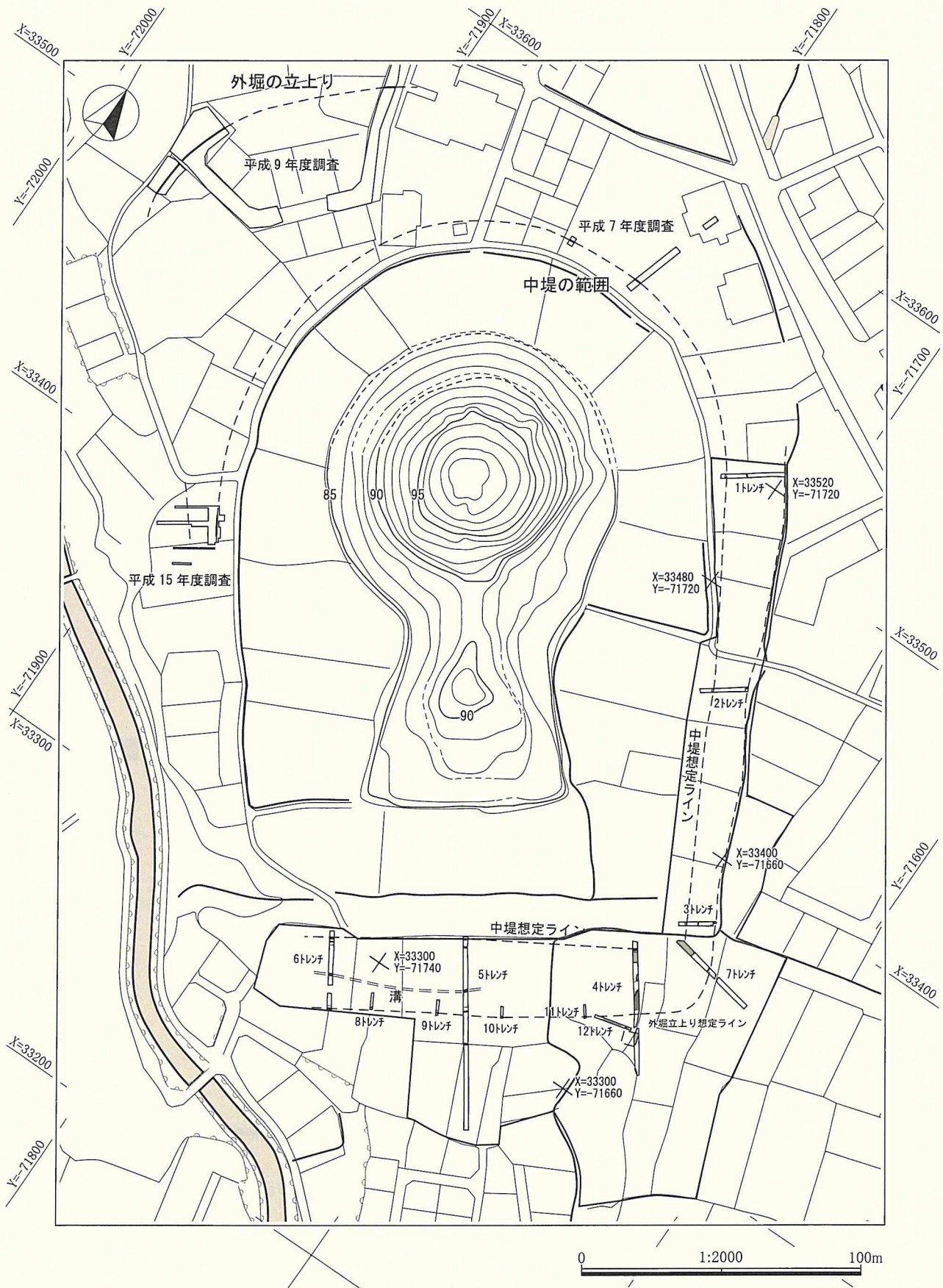
第1図 周辺の遺跡図

0 1:25,000 1km

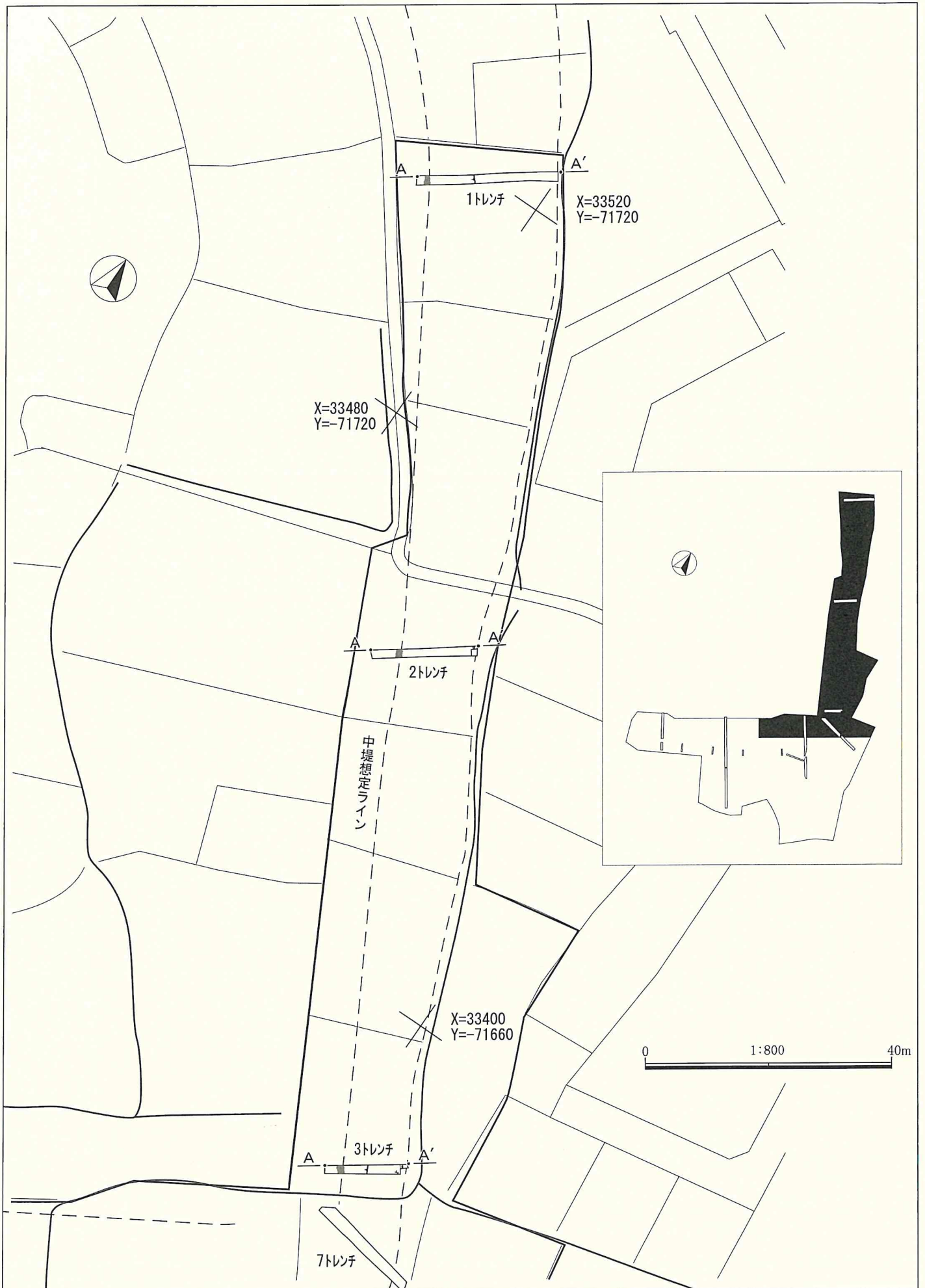
遺跡名	概要	遺跡名	概要
1 浅間山古墳	中期前方後円墳 本報告	13 田端遺跡	縄文～平安時代の集落・中近世土坑
2 漆山古墳	後期前方後円墳 ※1	主な文献 『田端遺跡』1988 群埋文	
3 小鶴巻古墳	中期前方後円墳 ※1	14 田端廃寺	推定地、7世紀末頃の廃寺
4 大鶴巻古墳	中期前方後円墳 ※1	主な文献 『田端遺跡』1988 群埋文	
5 上佐野船橋5遺跡	平安時代の集落・土坑・溝	15 矢中村東A遺跡	平安時代B下水田・「物部私印」
主な文献 『上佐野船橋遺跡5』2014 高崎市教育委員会		主な文献 『矢中村東遺跡』1984 高崎市教育委員会	
6 船橋遺跡	円墳・小石塚・古墳～平安時代の集落	16 倉賀野上樋越遺跡	平安時代の集落・B下水田・中近世の溝
主な文献 『船橋遺跡』1989 群埋文		主な文献 『倉賀野上樋越遺跡』2014 高崎市教育委員会	
7 上佐野船橋4遺跡	円墳・奈良～平安時代の集落	17 倉賀野条里ⅠⅡⅢ遺跡	平安時代の集落・B下水田・溝・土坑
主な文献 『上佐野船橋4遺跡』2015 高崎市教育委員会		主な文献 『倉賀野条里遺跡』2001 高崎市教育委員会	
8 下佐野遺跡Ⅰ・Ⅱ地区	縄文～平安時代の集落・土坑・方形周溝墓	18 宮原町遺跡・宮原町遺跡2	平安時代B下水田
主な文献 『下佐野遺跡Ⅰ地区』1989 群埋文		主な文献 『宮原町遺跡』2016 高崎市教育委員会	
9 倉賀野万福寺遺跡	円墳・縄文～古墳時代の集落・方形周溝墓	19 安楽寺古墳	終末期古墳・横口式石塚 ※1
主な文献 『倉賀野万福寺遺跡』1983 高崎万福寺遺跡調査会		A 倉賀野古墳群	中期前方後円墳・後期群集墳 ※1
10 金井沢碑	国指定史跡(726年)	B 佐野古墳群	前期古墳～後期前方後円墳・群集墳 ※1
主な文献 『高崎市史』1999 資料編2 原始古代Ⅱ		C 木部北城	戦国時代 築造:木部氏か ※2
11 山名土合遺跡	後期古墳(円筒埴輪列・家形埴輪)	D 木部氏館	15世紀 築造:木部氏 ※2
主な文献 『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書9』1995 高崎市教育委員会		E 木部城	16世紀 築造:木部氏 ※2
12 八幡山遺跡	縄文時代前期後半の土偶・土器片 ※1	F 根小屋城	16世紀 築造:武田氏 ※2

主な文献 ※1『高崎市史』1999 資料編1 原始古代Ⅰ  
※2『高崎市史』1996 資料編3 中世Ⅰ

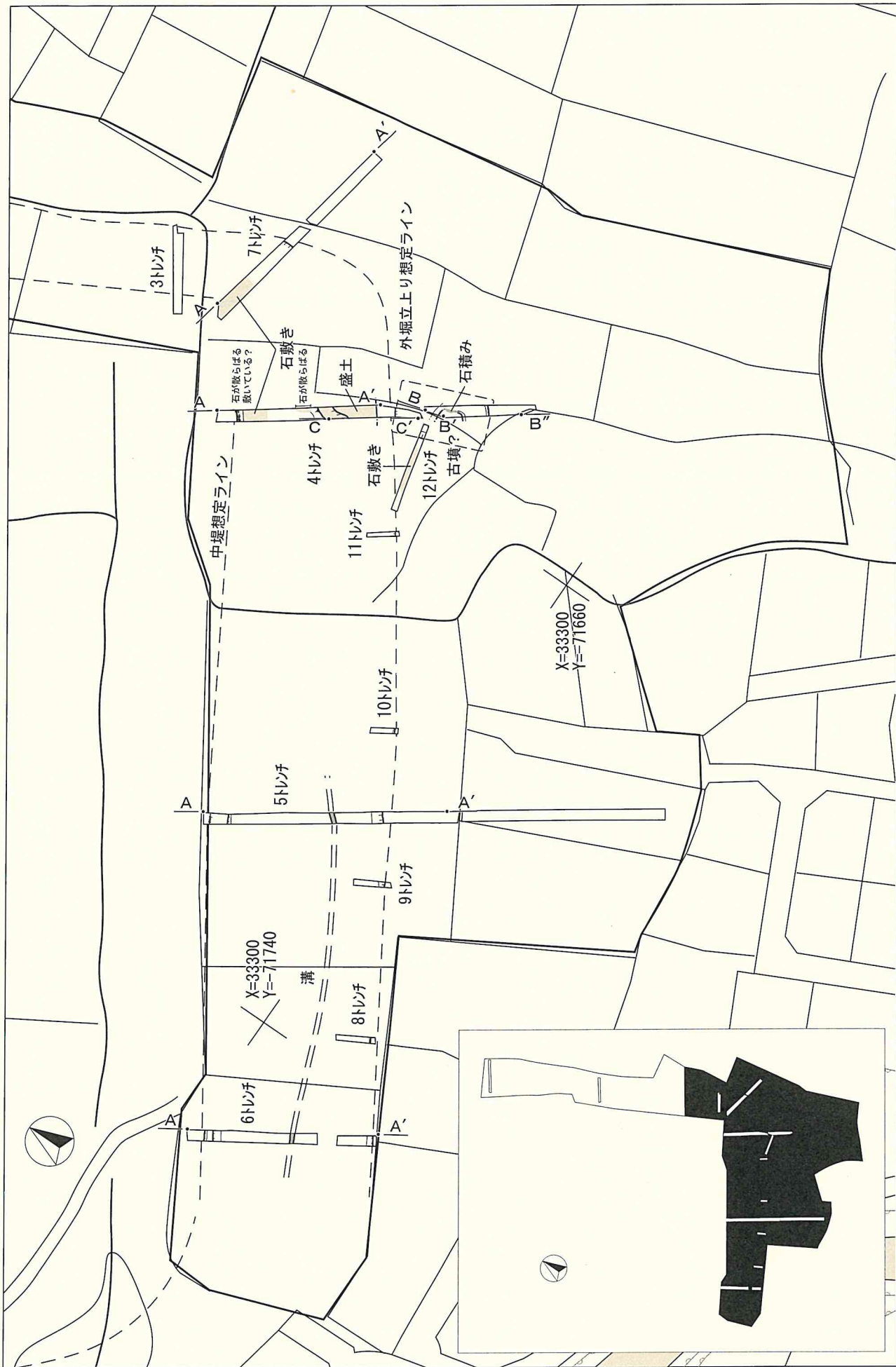




第2図 調査箇所位置図

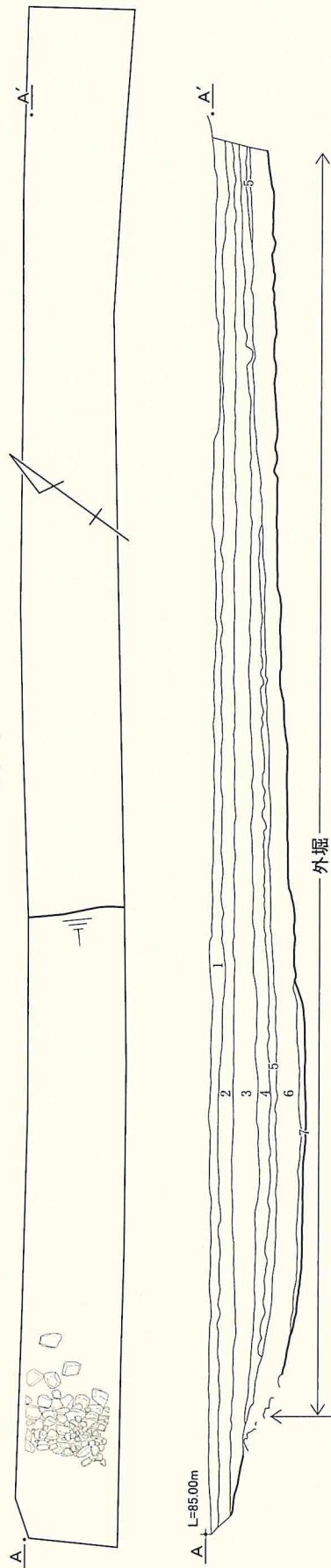


第3図 調査区 東側 平面図



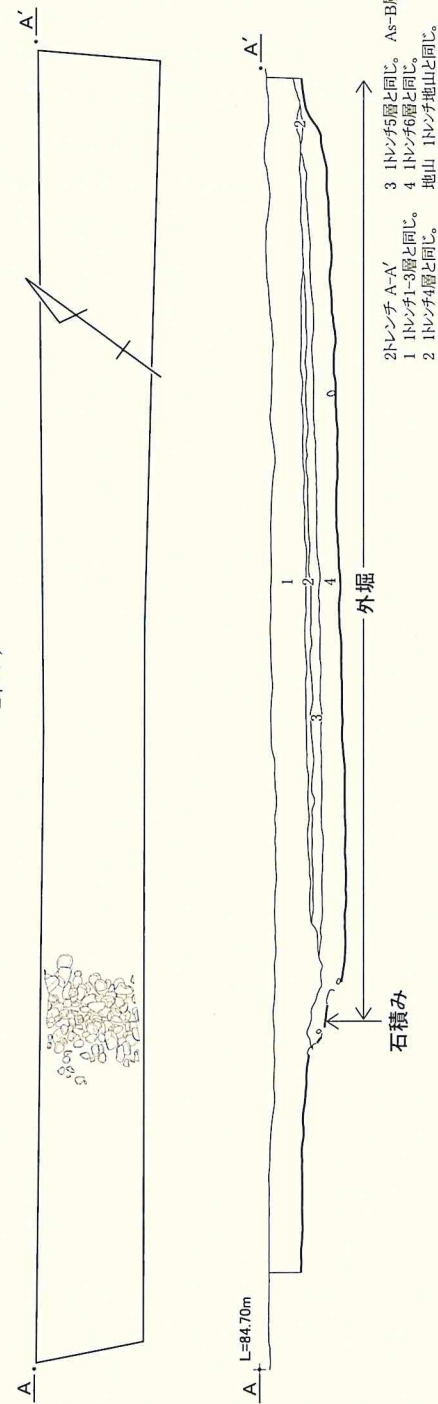
第4図 調査区南側 平面図

1 トレンチ



- 1 トレンチ A-A'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) やや粘性・しまる。シルト質。As-AorAs-B混入。水田の耕作土。
  - 2 黄褐色土(10YR4/3) やや粘性・しまる。As-BorAs-A混入。白色系パミス粒径2-3mmまばらに混入。
  - 3 暗褐色土(10YR3/3) やや粘性・ややしまる。As-BorAs-A混入。小レキ・白色系パミス粒径1cm以下まばらに含む。
  - 4 黒褐色土(10YR3/2) わずかに粘性・ややしまり弱い。As-B混入。
  - 5 As-B層 相対的に低い部分ピンク灰見られる。一次堆積層。
  - 6 黒褐色土(10YR2/2) シルト質。粘性強い・しまる。白黄・白色系パミス粒径2mm以下少量。上下層境界黒味。(土壌化)
  - 7 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘性あり・ややしまり弱い。土質粗い。(小レキ径1cm以下まばらに含む。)
- 地山 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘性あり・ややしまり弱い。土質粗い。(小レキ径1cm以下まばらに含む。)

2 トレンチ

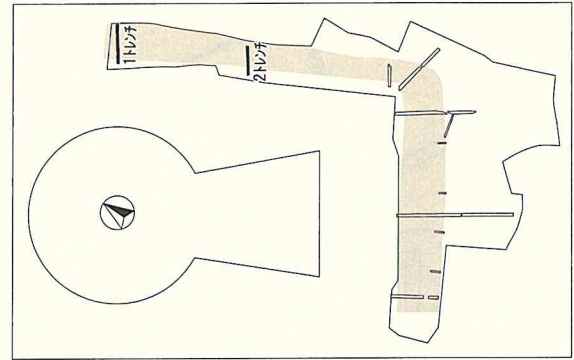


- 2 トレンチ A-A'
- 1 トレンチ1-3層と同じ。
  - 2 トレンチ4層と同じ。
  - 3 トレンチ5層と同じ。As-B層。
  - 4 トレンチ6層と同じ。
- 地山 1 トレンチ地山と同じ。

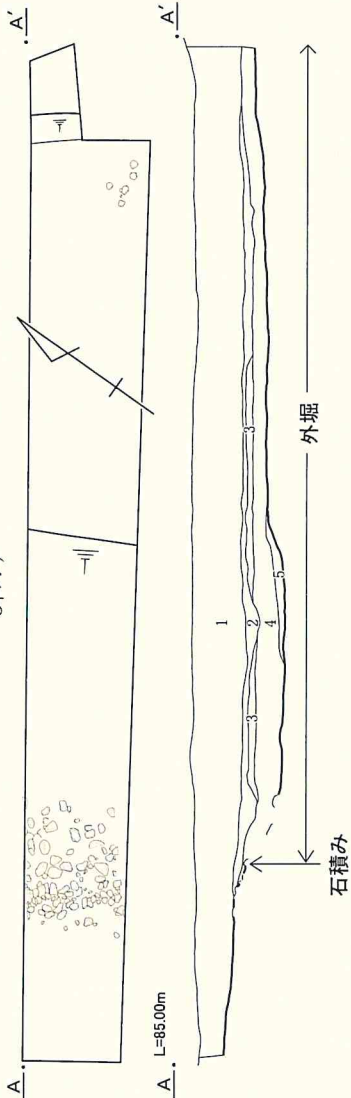


(平面図・断面図)

第5図 1 トレンチ・2 トレンチ 平面図・断面図

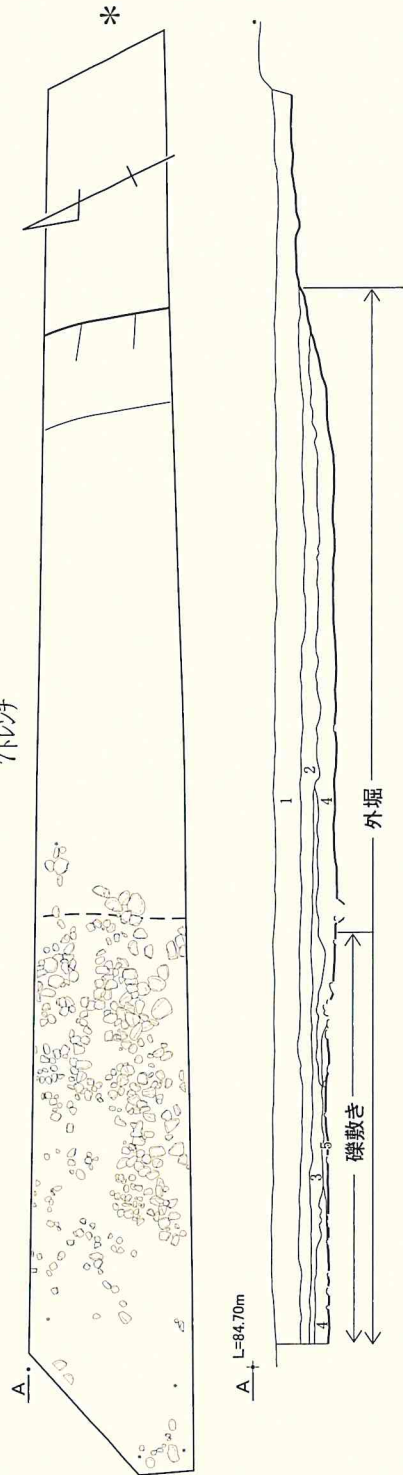


3トレンチ

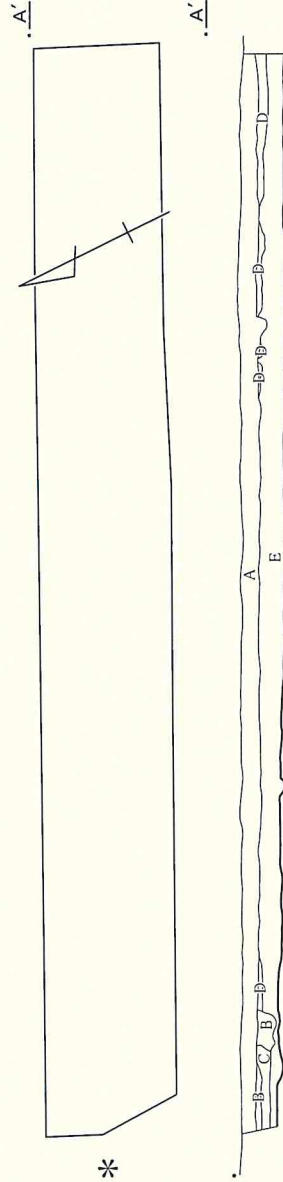
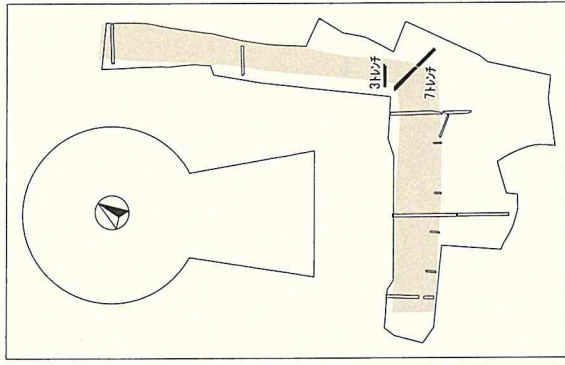


- 3トレンチ A-A'
- 1 1トレンチ1-3層と同じ。As-AorAs-B混土。
  - 2 1トレンチ4層と同じ。
  - 3 1トレンチ5層と同じ。As-B層。
  - 4 1トレンチ6層と同じ。
  - 5 黒褐色土(10YR2/2) 粘性強い、ややしまり弱い。シルト質。地山土ブロック状含む。
- 地山 1トレンチ地山と同じ。

7トレンチ

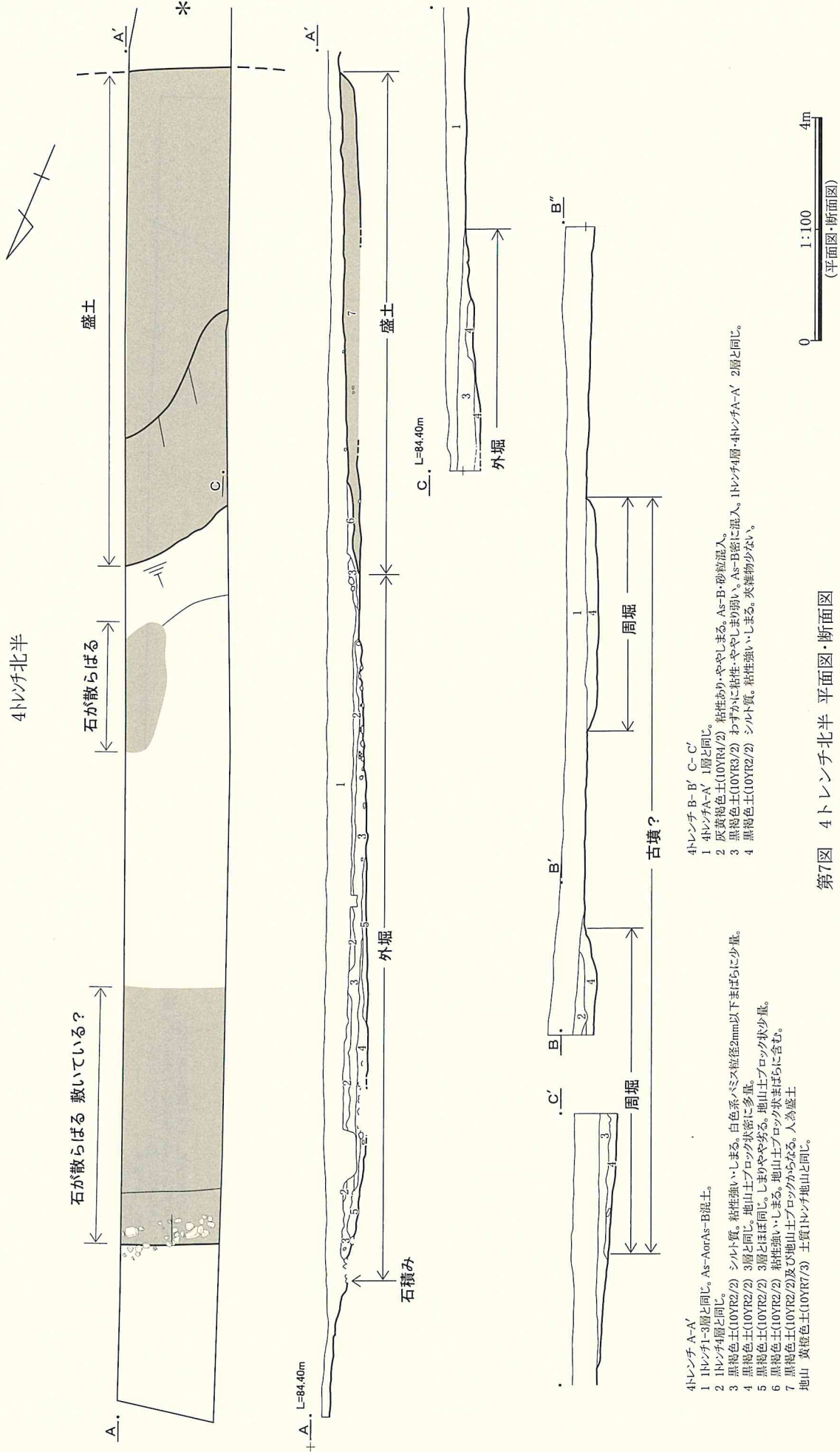


- 7トレンチ A-A'
- 1 1トレンチ1-2層と同じ。
  - 2 1トレンチ3層と同じ。
  - 3 As-B主体 黒褐色土(10YR3/2)(1トレンチ4層と同じ。)主に上層部に混入する。
  - 4 黒褐色土(10YR3/2) やや粘性、ややしまり弱い。他の粘性強い、黒色系シルトと異なる。
  - 5 明黄褐色土(10YR6/6) 粘性なし。砂粒と地山土ブロックからなる。部分的に硬い、鉄分沈着。
- 地山 黄褐色土(10YR7/3) 土質1トレンチ地山と同じ。  
 A 1トレンチ1層と同じ。現木田耕作土。  
 B As-A? (径3mm以下の軽石) 主体。  
 C 灰黄褐色土(10YR4/2) やや粘性、しまる。As-B混入。希薄、まだらに鉄分沈着。  
 D 2層と同じ。  
 E 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あかしまる。シルト質ではなく相對に土質粗い。



第6図 3トレンチ・7トレンチ 平面図・断面図

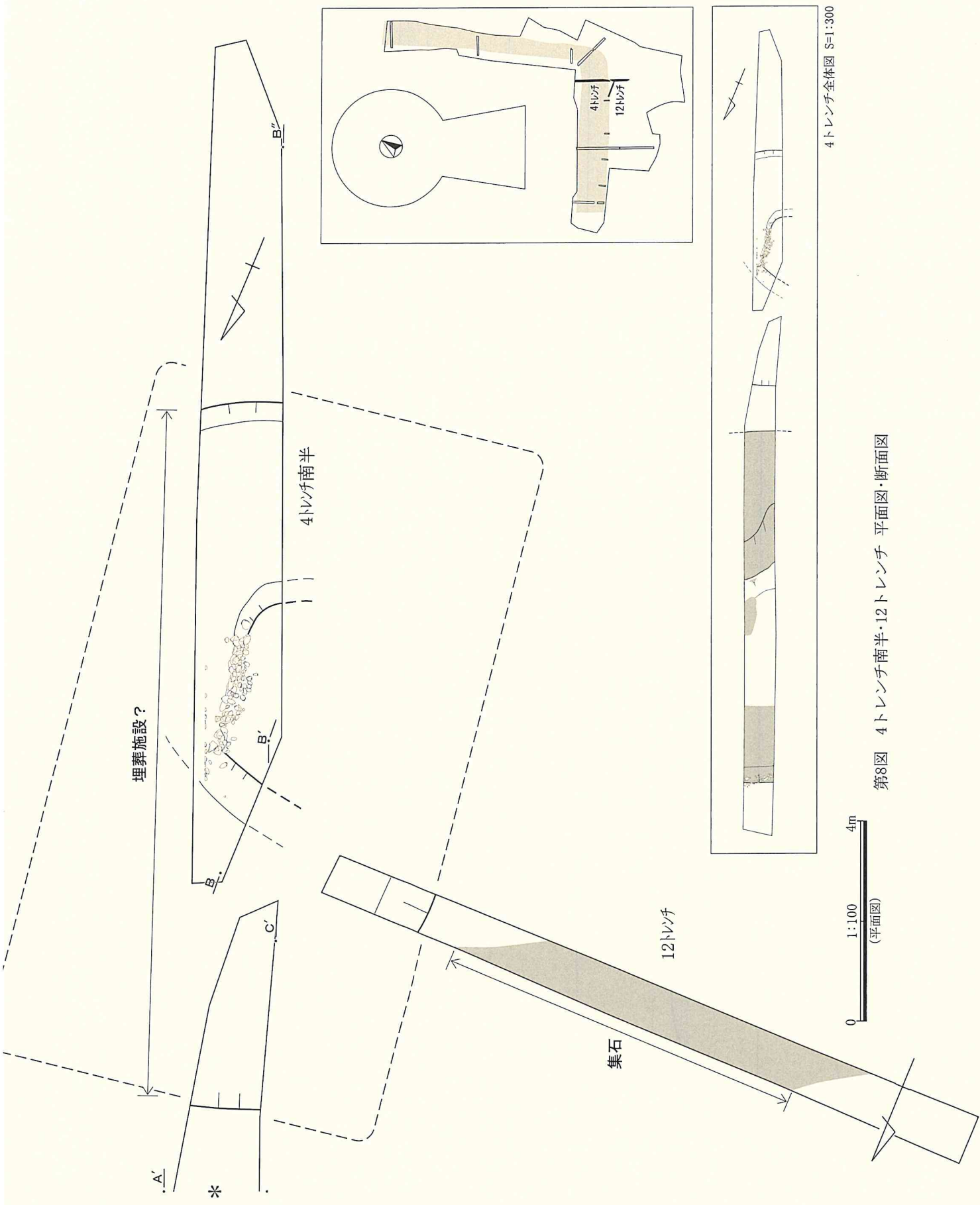
4トレンチ北半



第7図 4トレンチ北半 平面図・断面図  
(平面図・断面図)

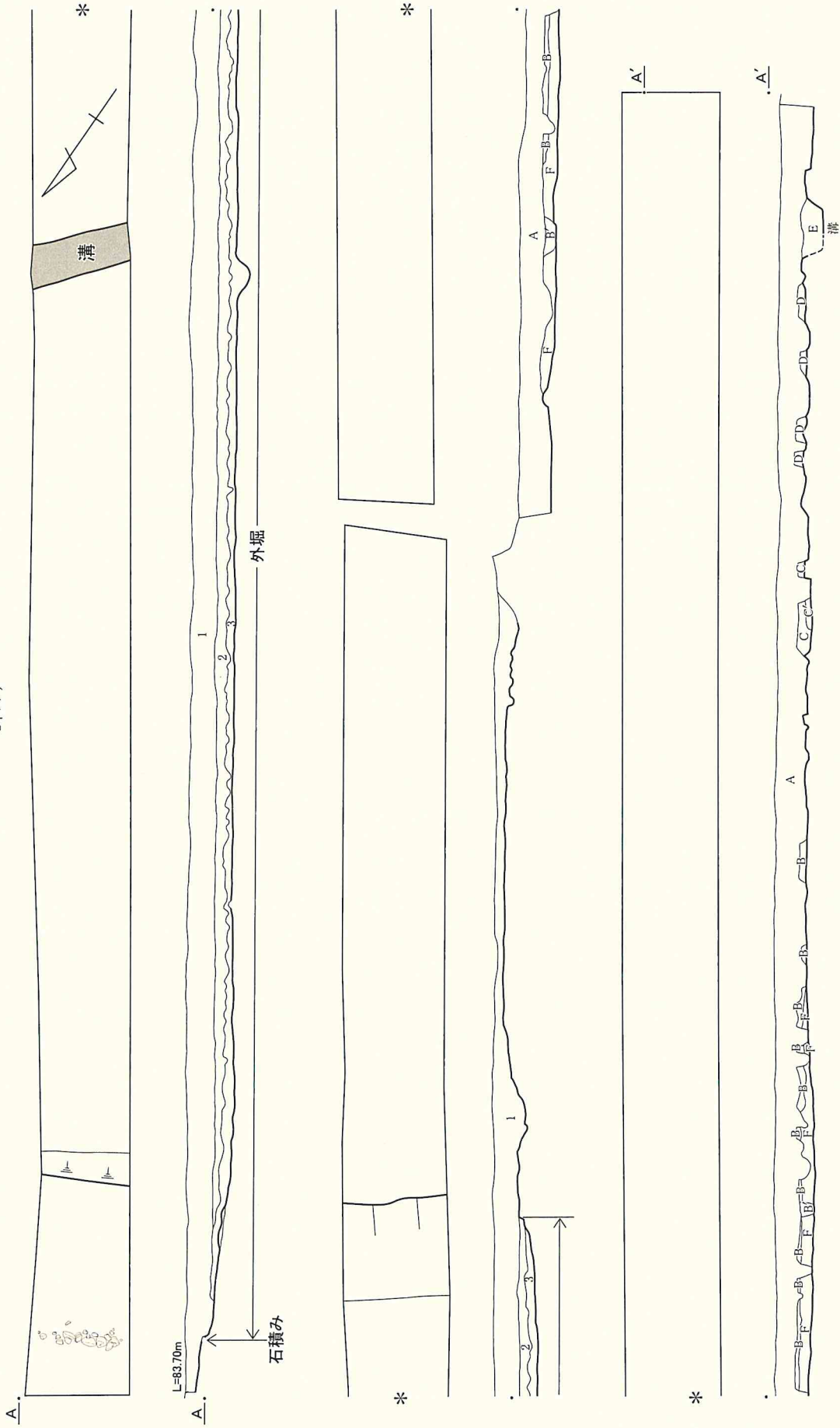
4トレンチ A-A'  
1 1トレンチ1-3層と同じ。As-AorAs-B湿土。  
2 1トレンチ4層と同じ。  
3 黒褐色土(10YR2/2) シルト質、粘性強い。しまりやや劣る。地山土ブロック状少量。  
4 黒褐色土(10YR2/2) 3層と同じ。地山土ブロック状少量。  
5 黒褐色土(10YR2/2) 3層とほぼ同じ。しまりやや劣る。地山土ブロック状少量。  
6 黒褐色土(10YR2/2) 粘性強い。しまりやや劣る。地山土ブロック状少量。  
7 黒褐色土(10YR2/2)及び地山土ブロックからなる。人為盛土  
地山 黄褐色土(10YR7/3) 土質1トレンチ地山と同じ。

4トレンチ B-B' C-C'  
1 4トレンチA-A' 1層と同じ。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性あり。やしまる。As-B・砂粒混入。  
3 黒褐色土(10YR3/2) わずかに粘性。やしまり弱い。As-B密に混入。1トレンチ層・4トレンチA-A' 2層と同じ。  
4 黒褐色土(10YR2/2) シルト質。粘性強い。しまる。夾雑物少ない。



第8図 4トレンチ南半・12トレンチ 平面図・断面図

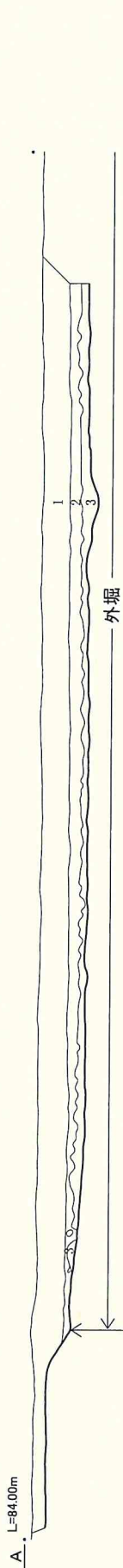
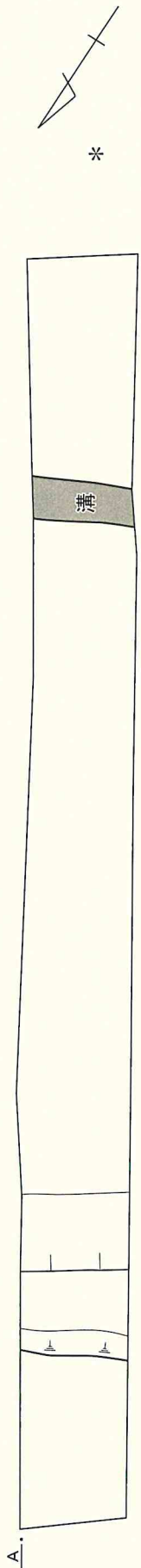
5トレンチ



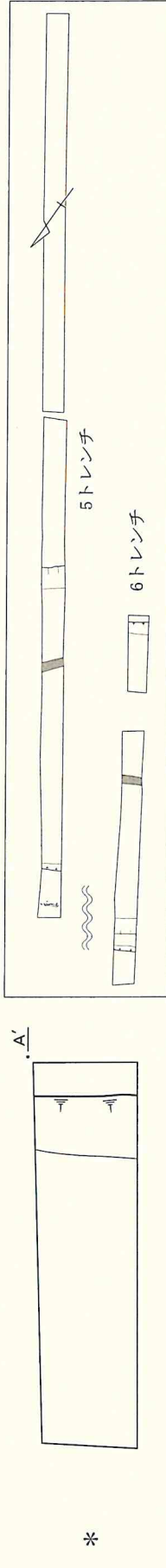
第9図 5トレンチ・6トレンチ 平面図・断面図



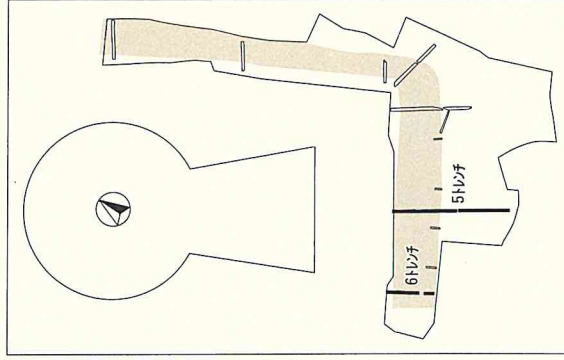
6トレンチ



石積み想定部

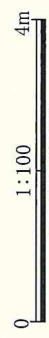


5トレンチ・6トレンチ全体図 S=1:500



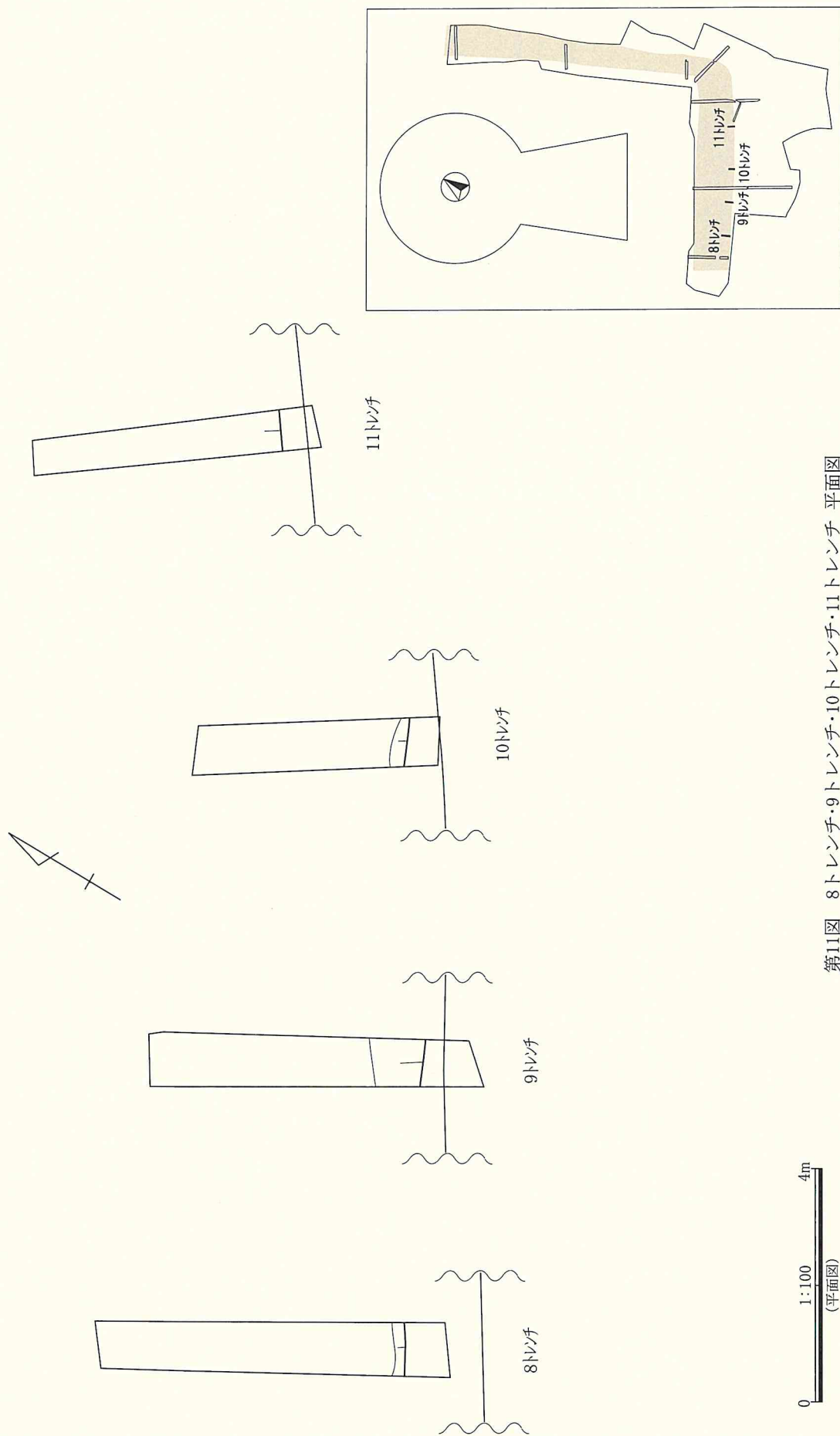
6トレンチ A-A'  
 1 1トレンチ1-3層と同じ。As-AorAs-B混土。  
 2 5トレンチ2層と同じ。  
 3 1トレンチ6層と同じ。粘性強い、シルト質。地山 5トレンチ地山と同じ。

5トレンチ A-A'  
 1 1トレンチ1-3層と同じ。As-AorAs-B混土。  
 2 黒褐色土(10YR3/2) わずか粘性・ややしめる。As-B密。下層部分As-B層が断続的にみられる。(As-B層上からの跡込みか)  
 3 1トレンチ6層と同じ。粘性強い。シルト質。  
 地山 黄褐色土(10YR6/3) 粘性あり・ややしまり弱い。土質粗い。小レキ含む。(拳大ほどのレキも少量あり。)  
 A 黄褐色土(10YR4/3) やや粘性・ややしめる。As-BorAs-A混入。耕作土。  
 B 黒褐色土(10YR3/2) わずかに粘性・ややしめる。As-B混入。  
 B' F層ブロックを含む。  
 C 黄褐色土(10YR4/3) やや粘性・よくしめる。As-B混入。地山土ブロック径1cm以下まばらに含む。3層ブロックを含む。  
 C' 地山ブロック多量。  
 D C層と似る。地山土ブロック含まない。  
 E 黄褐色土(10YR4/3) やや粘性・よくしめる。As-B含む。地山土ブロック径3mm以下まばらに含む。  
 F 黒褐色土(10YR3/2) やや粘性・よくしめる。白色系軽石径3mm以下まばらに少量。地山との境界やや乱れる。  
 ※ 3層とF層の違い、両層とも黒色系粘粒土だが、3層はややしまり劣り・シルト質。層中より遺物出土。(土師器片微量。)



(平面図・断面図)

第10図 5トレンチ・6トレンチ 平面図・断面図



第11図 8トレンチ・9トレンチ・10トレンチ・11トレンチ 平面図

## 第4章 総括

浅間山古墳は、大和の佐紀盾列古墳群の佐紀陵山古墳（奈良市・全長209m）と親和性の高い相似形の平面形を呈しており、下佐野遺跡群などで滑石や緑色凝灰岩を用いた玉造製作工房群が確認されたことによって浅間山古墳の築造時期とほぼ同時期に、倉賀野地域に早い段階で玉造集団が導入され、新たな祭祀体制への備えが存在していた事が考えられている。

埋葬施設については未調査のため不明であるが、堅穴系を有していたと推定されている。

過去の試掘調査と今回の範囲確認調査で浅間山古墳の中堤幅と外堀の範囲が判明した。兆域は約332m、古墳の周りを囲む内堀は均一な馬蹄形を呈しているが、外堀は後円部西側から北側で約56mから約65m、前方部前面では約23mから約26m、後円部東側から前方部側面では約10mから約20mを測るやや歪な馬蹄形を呈している。平面形は船底形とほぼ平坦である。中堤幅は後円部と側面で約10m、前方部で約20mを測る。課題としては、7トレンチ周辺の内堀・中堤・外堀のつながりが分からないため、今後の調査の必要がある。

浅間山古墳周辺は1トレンチから4・7トレンチ付近の水位が高く、内堀と外堀は湿地帯状態であった事が窺がえる。4・7・12トレンチで検出された鉄分を含んだ砂層に覆われた石敷きはこの内堀と外堀に溜まった水を排水するためのものと想定される。排水された水は12トレンチで外堀立上がり部が検出されなかった事から、この付近から下の谷地に流下させたものと考えられる。

5・6・8・9トレンチ周辺は水位が低いため、外堀中央部に幅60cmから1m、深さ15cmから25cmの溝が掘られ、排水を行っていたのではないかと推測される。

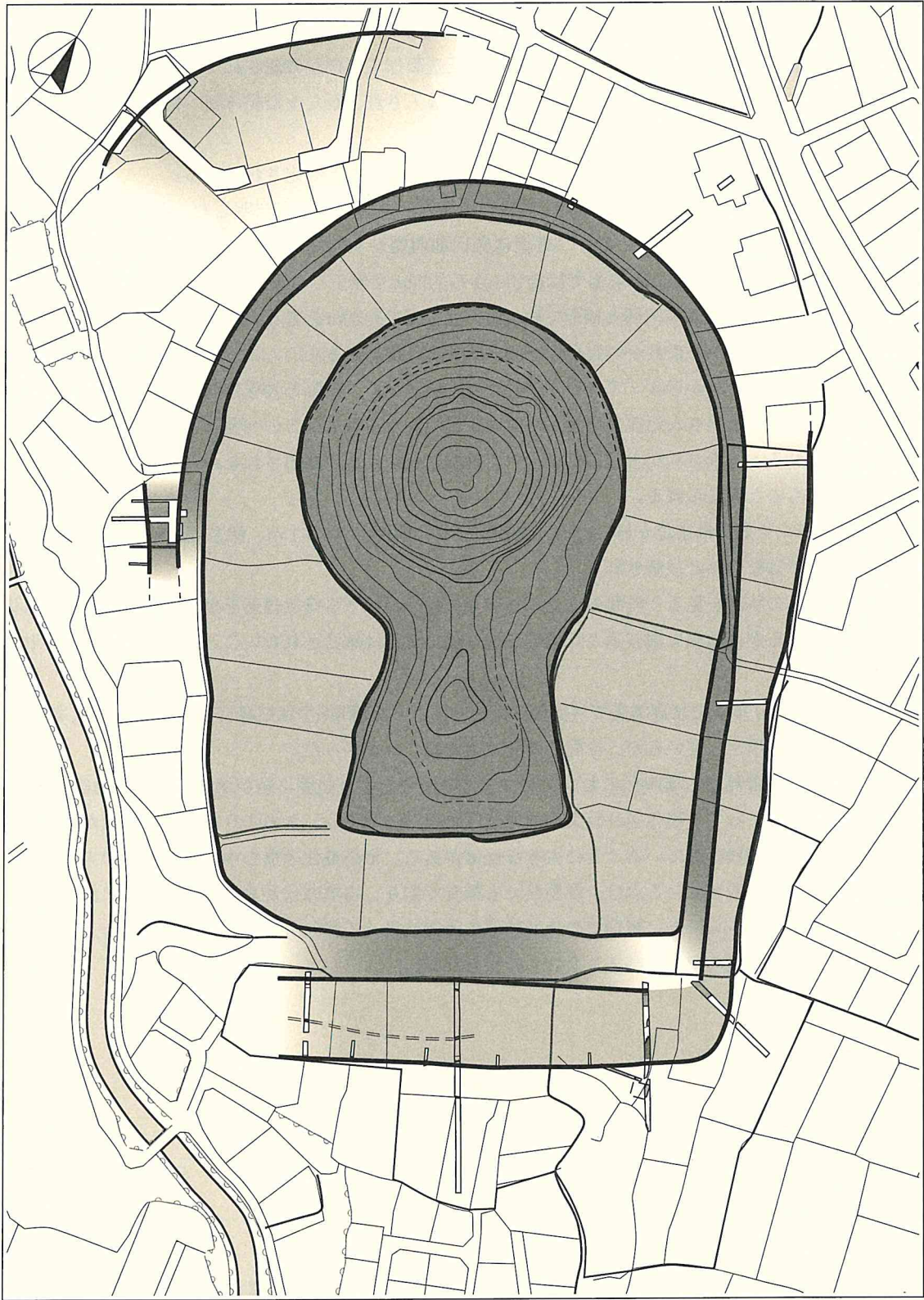
外堤は、5トレンチの状態を見ると外堀の立上がり部から緩やかに下る自然地形を呈し、7トレンチでも近代の水田耕作で削平されているが、地山を掘り込んだ溝等が造られた痕跡は確認されないことから外堤は構築されなかったものと想定される。

遺物に関しては、平成9年度の試掘調査で外堤の立上がり部から土師器S字状口縁台付甕や壺、器台、坏、須恵器坏、滑石製石製模造品が40点出土しているが、今回の調査では確認されなかった。

浅間山古墳は、現在の群馬が古墳時代においてヤマトとの関係をより強固に結び始める歴史を物語る古墳であり、それが地域の力の結集によって具現化された大型前方後円墳の1つである。このような重要な古墳が、その全貌を今もほぼ形状を保ったままで残存していることに大きな価値がある。市街地化の進む中、これだけの大型古墳が周堀の形状もきれいに地割として残っている点は、群馬県でも稀有であり、古墳時代からの歴史を如実に伝えることのできる歴史文化遺産といえる。さらに広い視野での地域動態の研究結果（若狭2007）を重ね合わせると、重層的な状況とその中核としての浅間山古墳の意義が高まるものと考えられる。

### 引用・参考文献

- ・群馬県 1981『群馬県史 資料編3 古墳』
- ・高崎市 1999『新編 高崎市史 資料編1 原始古代1』
- ・高崎市教育委員会 1996『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書10』
- ・高崎市教育委員会 1998『高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報2』
- ・高崎市教育委員会 2004『高崎市内遺跡発掘調査報告書』
- ・若狭徹 2007『古墳時代の水利社会研究』河出書房新社
- ・群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会 2012『群馬の歴史文化遺産 - 調査報告 - 』
- ・高崎市教育委員会 2017『高崎城遺跡24』



第12図 推定模式図